

展覧会に関する自己点検評価表（令和 3 年度）

---

1 「ストーリーズ」展

2 「忘れられた江戸絵画史の本流展－江戸狩野派の 250 年」展

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	ストーリーズ展		
期間	4月6日(火)～5月16日(日) (39日間)		
場所	静岡県立美術館第1～6展示室		
学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有 無
マスコミ等による共催の有無	有 無	巡回の有無	有 無

担当者名	川谷承子、石上充代、泰井良
------	---------------

記入日	企画	2021年 4月 30日(金)
	実績	2021年 10月 8日(金)

	企画	実績・検証
目的・内容	<p>【内容】 開館35周年を迎える静岡県立美術館のコレクションを中心に、日本画、日本洋画、現代美術の多彩な作品を取り上げ、所蔵館の学芸員ならではの視点で、普段の展覧会ではなかなか踏み込んでご紹介することができないコレクションにまつわるストーリーを語る。出品点数は、借用作品も併せ約90点。</p> <p>【目的】 コロナ禍の中で、遠方に足を伸ばして展覧会鑑賞に出かけることができない状況にあって、これまで何度となく紹介してきた当館を代表する収蔵品を、いつもとは違う切り口で紹介する。展覧会を通じて、これまで美術館に蓄積されてきたコレクションに関する研究の一端を紹介する。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 ・大変興味深い。展覧会づくりの内幕がわかりやすく記されており、単なる展示された作品解説に終わっておらず、充実した内容になっている。よほど作品と作者を理解していないと言及できないところまで明快に提示しており、楽しく記された一章一章がく作品について学芸員が知っていること)で満たされており、感銘を受けた。(金原委員) ・今回取り上げられた作品のほかにも作品個々の物語があるはずなので、シリーズ化も可能と思う。まずは地元身近なところから取り上げた点を高く評価する。こうした企画には学芸員の日ごろの調査研究の蓄積と企画力があらわれる。この度の展覧会ではその充実ぶりがよく示された。今後このような学芸員が維持されるよう期待する。(山梨委員) ・「鑑賞者への普及・啓発」という点ではすこぶる斬新な試みである。その反面、学芸員が「手の内を晒す」という側面があるのでさじ加減の難しさを伴う展覧会であった。全体としては、学芸員の研究面での充実を感じさせるが、内容の程度にバラツキがあったことも指摘しておきたい。とは言え、今回の試みは大いに肯定的に捉えている。このような挑戦的な試みは、学芸活動が充実している静岡県立美術館でこそ行い得る試みであるので、今後も挑戦してほしい。(潮江委員)</p>
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>【ねらい】 開館以来、幾度となく紹介されてきた静岡県立美術館のコレクションを、今回は、いつもとは違う切り口で紹介する。印象に残る、作品にまつわるストーリーとともに展示することにより、美術館のコレクションの魅力が、鑑賞者の記憶の中に残ることを狙いとした。</p> <p>【ターゲット】 コロナ禍のため県外からのお客様が来館しにくい状況であることから、主に静岡県中部、静岡県東部、静岡県西部。対象年齢は老若男女。</p>	<p>【アンケートにみる特徴】 来館者の年齢は20～50歳代が76%を占める。特に20歳代が25%と多い。東京都や大阪府をはじめ、緊急事態宣言発令中の地域があったことから、県外の来館者が1.4%と、伸びなかった一方、静岡市からの来館者が51.4%と半分を占めた。来館のきっかけは、ポスター、美術館WEB、チラシ、知人の誘いの順に多かった。作品やテーマへの興味関心の深まりの割合は、「はい」「どちらかというとはい」併せて98.6%と、高い割合をみせた。アンケートの自由回答欄には、出品していた作家の名前が具体的にあげられ、中でも伊藤若冲、石田徹也に言及するコメントが目立っていた。所蔵品を深く掘り下げて見せたことへの理解、共感、関心の高さがうかがえとともに、学芸員の視点、専門性についても評価するコメントが複数見られた。</p>
指標(数値目標)	観覧者数見込 10,000 人	観覧者数 5490 人
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>歳出 9,466千円</li> <li>歳入 5,623千円</li> <li>特財率 78.1%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歳出 8,889千円</li> <li>歳入 2,806千円</li> <li>特財率 31.6%</li> </ul>
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係者、近隣文化施設へのチラシの追加発送。</li> <li>・Facebookを通じた出品作品の紹介。</li> <li>・静岡大学「新入生セミナー」での展覧会紹介</li> <li>・「高齢者学級たちばな教室」での展覧会紹介</li> <li>・ラジオ番組を通しての展覧会紹介(FM-Hi、ラジオF)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静岡大学「新入生セミナー」への出講(地域創造学環1年生50名)</li> <li>・有度生涯学習交流館における高齢者学級たちばな教室講義(参加者79名)</li> <li>・生涯学習センター・公民館に重点的にポスター・チラシ送付</li> <li>・市内大学への広報を強化</li> <li>・静岡新聞4回、中日新聞1回、読売新聞2回 記事掲載</li> </ul>
自己評価 今後の課題	<p>・内容面については潮江委員の指摘にあるように、学芸員の「手の内を晒す」ような展覧会であったため、作品のどの側面に切り込み、どこまで踏み込むべきかの匙加減が大変難しく、試行錯誤した展覧会であった。作品の収集、保存、公開を通して学芸員が得た経験や知識を記録に残し、次世代に伝え残すことの大切さを改めて考えさせられる機会になった。新たな視点による収蔵品展であったことから、アンケート結果により、何度も美術館に訪れているリピーターであっても、内容面への新鮮な驚きや、関心の高まりを感じたようだった。</p> <p>・観覧者数については苦戦した。ゴールデンウィークを挟んだ春の行楽シーズンに開催したことや、伊藤若冲や石田徹也など、当館を代表する人気作家の作品を出品していたことから、県外からの来館を呼び込み、目標人数を超える入場者数を期待したが、いざ開幕すると、コロナの感染者増加にもない首都圏や関西圏は緊急事態宣言下であり、アンケートの結果からもわかるように、県外からの来館者が1.4%と、予想をはるかに下回る結果となった。当館のコレクションの魅力や、異なる地域の多様な立場の観覧者の目に触れ、展覧会への意見や反応を得たいところであったため、大変残念である。</p> <p>・収蔵品を活用した展覧会であることから比較的予算で開催することができ、さらに収蔵品企画展としては久々に図録を制作することができた事はよかった。今後は、この展覧会の経験をもとに、より発展させた内容の収蔵品企画展を開催したいと考えている。</p>	

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	忘れられた江戸絵画史の本流展－江戸狩野派の250年
------	---------------------------

期 間	5月22日(土)～6月27日(日) (32日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	野田麻美
------	------

学芸員の企画への参加の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>
マスコミ等による共催の有無	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>	巡回の有無	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>

記入日	企画	2021年5月6日(木)
	実績	2021年9月10日(金)

企画		実績・検証	
目的・内容	<p>【内容】 個人コレクター所蔵の江戸狩野派作品のなかから初公開の作品を選びすぐって紹介し、江戸時代の絵画の根幹を成した江戸狩野派のスタイルの展開を明らかにする初の展覧会。本展では、奥絵師4家の主要画家の作品を時系列で紹介し、江戸狩野派主流のスタイルの変遷を紹介する。そのうえで、表絵師12家の作品も取り上げることで、江戸狩野派の画風に多様性をもたらした表絵師の知られざる一面に注目する。</p> <p>【目的】 ・当館は、開館以来、江戸時代の狩野派の作品を収集し、全国随一のコレクションを形成してきた。長年にわたる研究成果を活かし、全国で当館にしかできない江戸絵画の展覧会を開催する。 ・江戸狩野派は狩野探幽一人が著名で、近代日本画の草創期に活躍した狩野芳崖に至る江戸狩野派の流れを追うことは、江戸絵画史の展開を考えるうえで最も重要な問題のはずだが、その活動の全容は不明である。本展で江戸狩野派の全貌を明らかにすることで、江戸絵画史を再検討するきっかけとする。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 ・これだけの江戸狩野派コレクションを築いた日照軒軒主の覚悟に、そしてコレクションを整理し、展覧会を実現した学芸員、静岡県立美術館に敬意を表す。当館でなければ開催できなかったのではないかと。文字資料から活動が窺い知れる絵師たちの作品が提示されたことで、今後の江戸狩野研究の出発点となるはずだ。江戸狩野派の歴史を考えるうえで重要な中橋家・木挽町・山下・下谷御徒士町家などの更なる究明、文字資料の今後の探索を期待したい。図録は二部構成で現時点での江戸狩野派の情報が良くまとめられている。寄託作品やデータベースなどの情報発信に期待したい(柳原委員)</p> <p>・展覧会の名称が面白く感心した。江戸時代の狩野派の展開を章立てにそって理解できるように工夫している。出品作品は充実しており、調査研究のためのものである。地味ながら県民は当時の作家の心ばえを知ったのではないかと。一方、浮世絵などの時代相を考えることも必要である。図録は充実しているが、江戸狩野派の巨大組織は、一般人にはいささか難しいだろう。国立館のように大きなパネルでわかりやすい解説を行っており、そうしたことも検討してほしい(金原委員)</p>	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>【ねらい】 ・近年、江戸絵画は人気があるが、江戸狩野派については作品紹介が進んでいない。江戸狩野派の知られざる作品を100点以上集めることで、江戸絵画に関心のある人々の潜在的なニーズを開拓する。(出品作品112点のうち、4点以外はすべて初公開作品。) ・江戸狩野派は、將軍に仕える奥絵師を頂点に、それを支える表絵師、その下に、諸藩の大名に仕える地方のお抱絵師、市井で活躍する町狩野が居るが、奥絵師最上格の木挽町狩野家の画家以外の作品はほとんど紹介されていない。江戸狩野派80名の画家、奥絵師4家・表絵師12家の画家の作品を紹介することで、江戸狩野派の全貌を紹介する。</p> <p>【ターゲット】 ・県内を中心とした中高年層 ・芸術のほか江戸狩野派に関心の高い人々 ・県内外の江戸絵画ファン</p>	<p>【アンケートにみる特徴】 ・コロナウイルスの感染拡大により、アンケートの母体が少なかった(以前担当した「美しき庭園画の世界」展(2017)、「幕末狩野派展」(2018)の約1/3) ・来館者の年齢層は、50代以上が55%と半分を超えたが、会場を毎日巡回したところでは、コロナウイルスの感染拡大のためか、従来の日本画の展覧会に比べて若年層が多く、高齢層が少なかったように感じた。アンケート数が少ないのは、実施日の日程の問題以上に、アンケートに時間を割いてくれるのは高齢者層が多いからではないかと。20～30代のアンケート協力の方法を考えることも課題と感じた。 ・来館理由が、当館や他の「ウェブサイトやSNSをみた」が40%超となり、庭園画、幕末狩野派展に比べて大きく伸びた。 ・新規来館者は、静岡市外が約85%(県外30%)となっており、市外の人が多かった。ウェブサイト等の広報活動の結果との関連が推定される。</p>	
指標(数値目標)	観覧者数見込 10,000人	観覧者数 5,661人	
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歳出 13,905千円</li> <li>・歳入 6,703千円</li> <li>・特財率 48.2%</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歳出 11,603千円</li> <li>・歳入 4,013千円</li> <li>・特財率 34.6%</li> </ul>	
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットでのプレスリリース配信会社の利用</li> <li>・静岡駅構内でのサテライト展示</li> <li>・サテライト展示と同時に展覧会場内で開催する選挙イベントの進捗状況をSNSで随時更新し、展覧会の周知を行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットを活用した幅広い周知(ARTPRなどが功を奏し、ネット・新聞・TVなどに多数取り上げられた。</li> <li>・コロナウイルスの感染拡大でサテライト展示が県立中央図書館での開催となったが、隣接の県立館との連携事業ができた。</li> <li>・「ニコニコ美術館」放送では2万人を超す視聴があった。</li> <li>・選挙イベントは来館者の4割近くが参加し、盛況だった。</li> </ul>	
自己評価 今後の課題	<p>当館で開館以来収集の柱とし、定期的に開催してきた「狩野派の世界」展としては、寄託品のみで行う点でこれまでとは異なる試みを行った。これまでの「狩野派の世界」では、各画家の名品、優品を展示してきたが、今回は、研究者含めてほぼ知られていない画家が大半という、「未知の狩野派」に焦点を当て、作品の質よりも、狩野派とはどのような組織であるか検証し、その展開を具体的に示すことで来館者の知的好奇心を刺激するという点に注力した。来館した研究者やSNSなどの反応を見る限り、この狙いは展覧会に関心を抱いた人には好意的に迎えられたと思われる。「狩野派」という存在そのものへの関心を高めるきっかけになったように思う。</p> <p>現在の江戸絵画の展覧会では、未だメディアが仕掛ける、名品や話題作を集めた大型展が首都圏を中心に数多く開催されるが、今後、若い層に江戸絵画ファンを広げていく際に、本展形式の「文脈解説型」の展覧会を自主企画で開いていくことも、一つの方向性を探る上で重要と感じた。その際、インターネットを活用した広報戦略がより重要な意味を持つため、その点を抜本的に見直し、現在の方法的課題を洗い出すことが必要になるだろう。最重要課題と考えるのは、図録をはじめ、展覧会グッズのEC決済可能な通販サイトの開設であろう。今回、図録販売を外部ECサイトで行ったが、その契約が展覧会最終週直前となり、契約直後に放送した「ニコニコ美術館」後、会期終了までにECサイトで図録が4回売り切れた。展覧会に来られない遠方のインフルエンサーなどが会期中図録を買った場合、ツイッター等で呟いてもらうことで広報効果がある。会期終了後は売れ行きが鈍るため、商機を逃すと特財率にもかかわる。展覧会開始直後からの通販開始が望ましい。</p>		